

# 24 公益社団法人 日本駆け込み寺

□公開日時:平成 25 年 5 月 10 日(金)

□相談年度:平成 23 年度

## ■刹那的になっている子どもは危ない■ ～浮遊する子供たちに大人が無関心ではいけない～

「娘が言うことをきかないんです。何かあるとプチ家出を繰り返し、2、3日帰ってこないんです。何かいい方法はありますか?」そう言って面談に現れたのは、全身をブランドもので固め、口調や振る舞いはいかにも教育ママっぽい女性だった。

■仮名:名取さん

■年齢:47歳

■性別:女性

■問題:家出

### 【譲歩できない母と娘の関係】

同世代の夫は外資系企業で働き、そこそこの収入がある。子どもは大学生の息子和高校生の娘。先祖代々の遺産があり、住まいは都内某所、閑静な高級住宅街にある。母屋には姑が、離れに相談者一家が住んでいる。いわゆるセレブな家庭だった。家出した娘の居場所、行動範囲を知りたいのであれば、探偵事務所に頼めばよいことだが、そこで人生相談はできない。かといって、警察にまで出向いて大事にはしたくない。それで、私のところへ来たというわけである。

「お母さんは全然私のこと、理解してくれない」だから家にいたくない。娘のことを夫に相談すると、妻にこう言ったそう。だ。「そんなに言うんだったら、留学でもさせろ。家のことは全部おまえに任せるんだから」父親は家のことは妻に丸投げだった。「なんで家出するの?なんで親の言うこときけへんねん」笑顔まじりに娘に尋ねたところ、こともあろうか、母親はすでに別のことでもめていた。

### 【寂しさを紛らわすため援助交際】

母親に席を外してもらい、娘と2人で話した。「なんで、あんなものの言い方すんの?」「だって、お母さんは世間体ばかりで、なんも変わってくれない。私がやることなすこと、いちいちうるさくて、ホントめんどくさい」今は何より、大手SNSでの出会いが楽しいという。「へえ。出会いが楽しいって、なら、おまえいくとこまでいったん?」「いったよ」俺はなんでもありやと思うけど、そんな、お母さん、知ってるの?」「知るわけないじゃん。私の人生だし。エッチしたからって法律には違反してないし。自分の身体だし誰としたり、やること変わんないから、結局」。

片や母親。こちらの方が、もしかしたら娘以上に精神的に子どもかもしれない。「そんなに娘に化粧品使われるの嫌やったら、部屋に鍵閉めたら?」「本当にもう、あの子のすること、信じられないわ」母親としてはないものねだりで、どこに出しても恥ずかしくない、品行方正な娘、清純な娘になってほしいと切望していたのである。

### 【親も完全ではない、落ち度も秘密もある】

このケースの場合、幼稚な母親にまずその意識を変えてもらわないといけないと思ったが、40半ばにもなった女性の価値観を、180度変えるのは容易ではない。かといって、娘は反抗期真ただ中である。すでに「娘」ではなく「女」になっている。おいそれと親が手綱を引くこともできない。落とすところは父親からの提案だった。「留学」である。大手SNSを通じて援助交際するぐらいなら、オーストラリアでも、カナダでも、どこへでも留学したらいい。幸い、その手が打てるだけの金銭的余裕はこの家にはあるし、何より娘自身は「家を出たい」と言っているのだから問題はない。

父親、母親、そして娘。話しを聞けば聞くほど、家族がそれぞれ好き勝手なことをして、自分の言い分を通すために懸命になっているだけである。経済的には十分恵まれているにもかかわらず、あつて当たり前の思いやり、家族愛のかけらがこの家族にはなかった。関係も気持ちも冷えきったまま、自己主張だけしている。ただ、娘の件が一件落ち着しようと、この母親は、この先またどこかに、誰かに自分の不安をぶつけて生きていくのだろうと思わせた。彼女の不満の元は娘ではなく、自分が夫に愛されていないことから始まっているからだ。その危うくも、絶妙なアンバランスさで、この家庭は成り立ってきたのかもしれない。〈意外と、こういう関係もアリなのかもしれない〉私は私、あなたはあなた。それぞれがそれぞれであつて、一心同体ではない。それをよしとして、この関係を維持していくのであれば、やはりそこには、家族として、人としての最低限の「斟酌」が必要だろう。

数ヶ月話し合いを重ねた末、「やはり、1人で海外はちょっと心配」という娘の意見も尊重し、父方の親戚がいる北海道へ転校することになった。彼女が北海道に引越して2年が過ぎた。同じ言葉を言われても、親の言葉は受け入れられないけれども、他の人の言葉なら耳を傾けられるということはある。今、彼女は北海道の親戚の家で暮らしながら、北国の高校に通っている。豊かな自然の中で彼女は変わった。いや、元に戻っただけかもしれない。根は素直な子だったのだ、きっと。



Hidemori Gen

5月25日スペシャルイベント「玄論会」  
会場:LOFT PLUS ONEにて開催!

### 【ここが POINT】 .....

親の顔も見たくない。家に帰りたくない。いつの時代もそんな子どもたちは腐るほどいる。誰もが通る“はしか”のような道だ。では、ただの反抗で踏みとどまる子、堕ちていく子、その違いはどこにあるのだろうか。それは、学校での居場所、立ち位置がその子にあるか、友だちがいるかである。話し合える人、相談できる人、心を許せる人がいることは、子どもだけでなく、人として心強いものだ。「私たちのことばかり責めるけれど、大人の方がよっぽど汚いじゃん。ずるくて、卑怯で、自分本位で」まだそう言って、歯向かってくる子どもはいない。何もかもあきらめて、刹那的になっている子どもはさらに危ない。「今を楽しもう。今を生きなきゃ、明日なんかわかんないよ」明るい、完全に快樂主義的で冷めている。「だってみんな経験じゃん。来年になったら卒業よ」そう言いながら、子どもじみた悪さから卒業できずに、いつまでも浮遊しつづける子ども達に大人が無関心ではいけない。大人の無関心を子ども達は見抜いている。